

のかうけちなるを、うしとらざまにすぢかへてたつべし、

〔大饗雜事〕一几帳帷 左。手。西。久。安。記。云。依。及。深。更。略。之。母。屋。第一間立之、可出祿故也。

〔新猿樂記〕三郎主者細工并木道者也、中。基。帳。足。屏。風。骨。略。 中 總風流曲節、無所可喻人、

〔空穂物語〕樓の上之上上き帳のかたびらふとひきあけて御らんずれば、内侍のかみのひき給には

あらで、ほかげのあかきにいぬ宮のいとしろうつくしげにて、ひきる給へるなりけり、

〔枕草子〕四 ありがたきもの

みすのいとあをくおかしげなるに、きちやうのかたびら、いとあざやかに、すそのつますこしう

ちかきなりて見えたるに、略。下

〔枕草子〕八 むかしおぼえてふようなる物

きちやうのかたびらのふりぬる

〔今昔物語〕二十四 碁擲寛蓮值碁擲女語第六

今昔略。中 寛蓮放出ニ上テ見レバ、伊與簾白クテ懸タリ、秋ノ比ノ事ナレバ、夏ノ几帳清氣ニテ、簾

ニ重子テ立タリ、

〔禁秘御抄〕上 一 清涼殿

帳 四面有。几。帳。帷。夏。生。以。胡。粉。畫。花。鳥。冬。朽。木。形。

〔松屋筆記〕八十九 朽木形几帳

與清曰、くち木形の名義、伊勢貞丈が死木にはあらで、落葉したる木なめりといへるも、一わたり

さもとおもはるれど、なほいかにぞや、こは朽木の枝の形なれば、然いへりと見ゆ、榮花若枝に、此

春には、うもれ木となきに、やとあるをも思ふべし、冬春の間は、几帳の帷の文様朽木形なれば、朽

木形の几帳といへり、されど朽木形のみに限れるにあらず、夏秋の間は、生に胡粉もて華鳥を

几帳足  
几帳帷